

歴史と「幼稚な正論」

日本計量史学会理事
新井 宏

歴史に遊ぶ者にとって、「歴史の現場」に立ち会えることは感激である。

そんな大袈裟なことを言っているわけではない。今日では誰でも、特段の資格も要せず、日々世界のニュースを簡単に入手できる。それがもし自分だけに知らされたものなら、どんなにか心が弾むことであろう。

一九八八年十一月。ベルリンの壁が崩壊した時、生きている内に、その結末を見たいものだと思つた。しかし歴史として検証されるには時間がかかる。ところが、あつという間に結果が見えた。

今や東ドイツ出身の女性、メルケル首相がドイツを率いているばかりか、全EUの指導者である。

六月二十三日、英国の国民投票でEU離脱が決まったとのニュースで激震が走っている。これこそ歴史の転換点ともいふべき大事件かも知れない。今の世界の繁栄は、精緻に仕組まれた構造物のようであり、何が起つても崩壊する脆弱さを持っている。いわば粉飾的な危うさである。だから、世界のリーダーは叡智を

集めて、必死に仕組みを守っているが、それに背を向けて、英国でも米国でも、分かり易い「幼稚な正論」が勢いを増している。何がおこるのであるか。

英国のEU脱退で真っ先に問われているのが、通貨の信用問題である。ポンドが下落するであろうことは素人でも判る。

ところで、通貨の信用度、国債格付けを見ると、超優良AAA級が十一カ国(独、蘭、加、米など)、続くAA級が十二カ国(英、仏、韓、中など)、そしてその後をやつとA級(日本、チェコ、ポーランドなど)が現れる。日本は五十カ国中の二十四位で、単純に言えば、かなり低い位置づけである。国の負債がGDPの二倍にも達する世界一の借金国だから無理も無い。

ところが、今度の英国EU脱退によって、「円」がますます痛恨の「最強通貨」になったという。痛恨という以上、日本にとって最悪の事態である。アベノミクスが何を置いても円安を推進したかったのであるから、これも良く判る。

しかし「幼稚な正論」から言えば、円の価値が上がるれば、国民がみんな喜んで当たり前である。資産にしても給料にしても、ドルで評価すれば、

大もうけである。

その上、国債格付け下位圏の「円」が、痛恨の「最強の通貨」になったという。祝杯でも上げねばなるまい。

もちろん、こんな「奇妙な現象」については、うんざりするほど多くの解説がある。

民族、宗教やイズムには「幼稚な正論」を純粹培養しやすい面がある。だから、それが暴走すると、「正義と正義」の戦いになる。

毎日のようにテロのニュースが入る。歴史的な結果を見たいなどと呑気なことを言っている場合ではない。うっかりすると独を除いて、仏、オランダ、ベルギーなどでもEU脱退の動きが強まるかも知れない。

ちようど百年前の七月、第一次世界大戦で英仏と独が戦い両軍合わせて三十万の死亡者を出したソムム会戦の構図と重なる。(前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)